

八尾・よろず考古通信

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌 年2回発行



令和元年度秋季企画展『やおの弥生時代(後期)―邪馬台国時代前夜のようす―』から

1. はじめに

令和元年度の秋季企画展として、『やおの弥生時代(後期)―邪馬台国時代前夜のようす―』と題した企画展を行いました。展示では、発掘調査の成果を基に弥生時代後期の暮らしを紹介しました。

2. 弥生時代後期(1世紀中葉～2世紀)の河内のようす

弥生時代中期後葉(B.C1世紀)の畿内は、環濠集落に代表される地域の大規模な拠点集落を中心に、広範囲にわたる地域間の交流・交易が盛んに行われていました。

ところが、後期前葉(1世紀)になると中期後葉の大規模な拠点集落は、そのほとんどが廃絶する傾向で、規模の小さい集落が点々と存在するようになり、新たに高地性集落が出現することで、集落の分布に変化が見られます(図1)。



図1 八尾市内の弥生時代後期の集落分布図

3. 市域の弥生時代後期の遺跡

①居住域

弥生時代後期の居住域は亀井遺跡、久宝寺遺跡、弓削遺跡、中田遺跡、東郷遺跡、萱振遺跡、恩智遺跡、郡川遺跡、大竹西遺跡、八尾南遺跡などから見つかっています。居住域を構成した建物には、^{たてあなじゆうきよ たてものほ} 竪穴住居(建物)や^{たてあなじゆうきよ たてものほ} 掘立柱建物があります。竪穴住居(建物)は半地下式の構造で、円形や方形のものがみられ、掘立柱建物には、平地式と高床式があり、高床式は倉庫の機能を持つものと思われる。

久宝寺遺跡第63次調査では、後期前葉の竪穴住居(建物)(写真1)が見つかりました。直径8.4mを測る大型の住居です。中央部に炉跡1箇所と柱穴7箇所のほか、壁際に溝を巡らせていました。

萱振遺跡第6次では、後期後葉の2棟の竪穴住居(建物)(写真2・3)が見つかりました。2棟とも、柱など



写真1 竪穴住居(後期前葉)《久宝寺遺跡第63次》



写真2 竪穴住居1(後期後葉)《萱振遺跡第6次》

の建築部材が焼け、住居内に倒れている状況を確認し、火災に遭ったことが判りました。同時期の焼失竪穴住居(建物)の事例は、市域では太田遺跡のほか大阪市の城山遺跡(長原遺跡)などで見つっています。

②高地性集落

中河内の生駒山地西麓部で確認された高地性集落には、岩滝山遺跡(東大阪市) (標高 100m前後)、花岡山遺跡(標高 40~60m) (写真4)、郡川遺跡(標高 70m前後)、高尾山山頂遺跡(柏原市) (標高 270m前後)などがあり、1世紀中頃~2世紀後半に営まれました。

集落の眼下には河内平野が広がり、大阪湾・明石海峡、淡路島、六甲山、北摂山地、和泉山脈を一望することができます。しかし、これらの高地性集落を営む頃も、平野部でも集落はたくさん存在し、争い事が原因で高地性集落が発生するのではない可能性も考えられます。高地での集落の新たな出現には、例えば、土器作りに必要な土の調達、建物や農具などを作る木材の調達、燃料調達のためなど、様々な要因が考えられます。

③生産域

水田は、耕作に必要な水の確保が容易な河川付近や後背湿地こうはいしつちに設けられています。市域の各遺跡からも後期の水田が見つっており、主な遺跡には池島・福万寺遺跡や八尾南遺跡が挙げられます。

八尾南遺跡第5次で見つかった水田(写真5 図2)では、微地形に沿って畦で区画した小規模な水田を作り、河川から水を引き入れています。

池島・福万寺遺跡では、水田および人工的に掘削した灌漑用水路かんがいせきや堰どろすいかんなどの水に関わる遺構が発見されています。

④墓域

墓域は小阪合遺跡、水越遺跡、八尾南遺跡などで発見されています。

小阪合遺跡第28・48次の墓域(写真6)からは、後期前葉~後葉の方形周溝墓8基と土器棺墓4基が見つかりました。また、八尾南遺跡第1次や府センター調査では、弥生時代後期後葉の方形周溝墓が確認されています。

これらの墓域は、河内の弥生時代後期における墓制の推移を考えるうえで貴重な資料です。



写真3 竪穴住居2 (後期後葉) <<萱振遺跡第6次>>



写真4 竪穴住居検出状況 <<花岡山遺跡第5次>>



写真5 河川に沿って広がる水田 (後期前葉) <<八尾南遺跡第5次>>



図2 八尾南遺跡第5次検出の水田模式図



写真6 方形周溝墓検出状況 (後期前葉~後葉) <<小阪合遺跡第28次>>

4. 弥生時代後期の生活道具

弥生時代後期の生活道具は土器・石器・木器・金属器(青銅器・鉄器)があります。土器においては、櫛描文が減少し、^{むもんか}無文化が進行します。また、後期前葉(1世紀)には長頸壺が、後期中葉には手焙り形土器(写真7)などの新しい器種が加わります。武器、農具、工具などは、石器から鉄器へ変化すると考えられています。このことを示すように打製石器や磨製石器が減少し後期後葉の河内地域においては、そのほとんどが消滅します。その反面、鉄器(斧(写真9)や鑿^{のみ})などや青銅器(鏃)が出土する遺跡が見られるようになります。



写真7 手焙り形土器
(後期中葉) <恩智遺跡>
〔1980『恩智遺跡Ⅱ』から転載〕

5. 遺物にみる後期の地域間交流

後期を通して、他地域からの搬入土器(外来系土器)が数多く見られるようになります。後期前葉には吉備系や讃岐系の瀬戸内海沿岸の土器が見られます。中葉～後葉には、北近畿系(写真8)、淡路系などの土器が目立つようになります。



写真8 北近畿系高杯
(後期中葉) <弓削遺跡>



写真9 鉄器(斧)
(後期中葉) <恩智遺跡>
〔1980『恩智遺跡Ⅱ』から転載〕

6. まつりの道具

まつりの道具には、突線鈕式銅鐸^{とっせんちゆうしきどうたく}があります。この銅鐸は、聞く(鳴らす)銅鐸から、見る(鳴らさない)銅鐸へ変化します。突線鈕式銅鐸は、近畿地方を中心とする近畿式銅鐸と愛知県(旧国名三河^{みかわ})から静岡県(旧国名遠江^{とおとうみ})にかけて分布する三遠式銅鐸に分かれます。後期後半(2世紀)には突如として姿を消します。八尾市では、突線鈕4式銅鐸の鱗^{ひれ}(図3)が亀井遺跡から見つかっています。

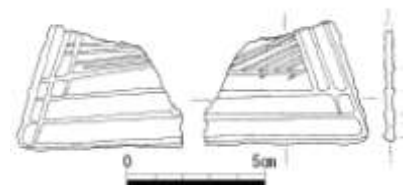


図3 突線鈕式銅鐸片 <亀井遺跡>
〔1999『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』から転載〕

7. 弥生時代後期から邪馬台国時代へ

弥生時代後期後葉(2世紀後半)頃には『魏志倭人伝^{きしわじんてん}』に記された「倭国乱」の記事などから、内乱があったと想定されます。その後、倭国女王卑弥呼^{ひみこ}の共立などを経て、弥生時代から邪馬台国時代(古墳時代初頭)に移行します。

令和元年度のイベントから

● 秋季企画展関連講演会

2019年10月27日(日)には、関連講演会の特別講演会を関西大学大学院非常勤講師の森岡秀人氏をお招きし開催いたしました。演題は『邪馬台国前史—近畿の弥生時代後期社会と八尾—』で、近畿地方を中心に邪馬台国時代へと移り変わる遺跡の状況を発掘調査のデータをもとに詳しく紹介して頂きました。



● 八尾・考古学散歩

2019年11月24日(日)には、八尾・考古学散歩を開催しました。今回は「中田遺跡の界隈を散策」と題し、中田遺跡をはじめその近隣に存在する小阪合遺跡、成法寺遺跡、東郷遺跡を巡りました。参加者は、集落の位置を確認しながら、当時の暮らしに思いを馳せておられました。



北近畿系の土器を発見！

今回は、弓削遺跡第1次調査の弥生時代後期中葉の溝(SD301)から出土した北近畿系の高杯(図4・写真8)について紹介します。

SD301は南東から北西へ延びる溝で、検出長54.0m、幅3.5~4.0m、深さ1.2~1.5mを測ります。この溝からは多量の後期中葉の土器が投棄された状態で見つかり、その中には北近畿系、淡路系、近江系など他地域から持ち運ばれた土器が混じていました。

北近畿系の高杯(図4)は、杯部下半が丸く膨らむ浅い椀形で、口縁部は屈曲した後やや内湾しながら外側へ伸び、端部は丸く終わります。口縁部の外面には擬凹線を施します。このような器形と施文は、北近畿(京都府と兵庫県の北部)の遺跡から出土する高杯に特有のものです。

形や施文が似る例には、京都府京丹後市の古天王^{ふるてんのう}5号墓から出土した高杯(図5)が挙げられます。ちなみにこの墓の第1主体部からは、河内地域で製作し搬入された所謂生駒山西麓産胎土の長頸壺(図6)が1点見つかっています。これらの遺物は、河内地域と北近畿の弥生時代後期中葉の交流を物語る貴重な資料として注目できます。

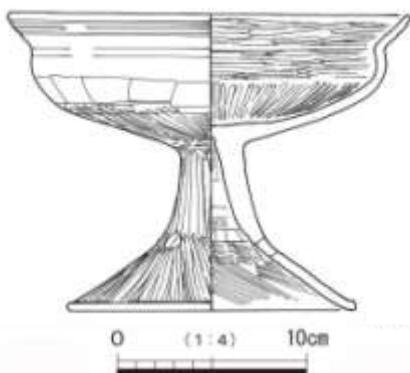


図4

図4
弓削遺跡第1次 溝(SD301)
弥生時代後期中葉
出典：2013『弓削遺跡第1次調査』
公益財団法人八尾市文化財調査研究会

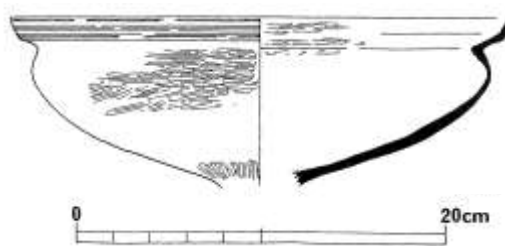


図5

図5、図6
京都府京丹後市 古天王5号墓
弥生時代後期中葉
出典：丸山次郎 2001『弥栄町内遺跡発掘調査報告書 京都府弥栄町文化財調査報告第19集』弥栄町教育委員会

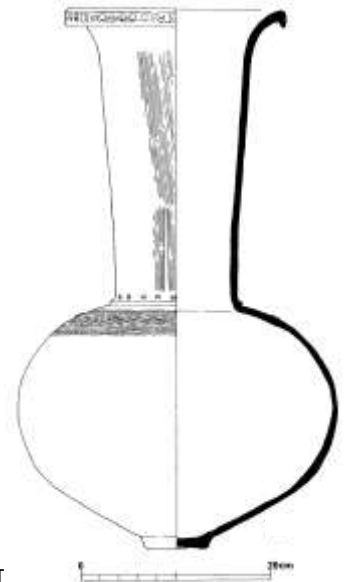


図6

編集後記

令和元年度秋季企画展では、市域の複数の遺跡で確認した弥生時代後期の土器廃棄遺構を取り上げました。

土器が大量に投棄されており「土より土器のほうが多いのではないだろうか」と言う表現が当てはまるくらい、沢山の遺物がこれらの遺構からは見つかっています。

土器の多さから、何人くらいの人々が生活していたのだろうか？なぜこんなにたくさん捨てたのだろうか？住んでいた人たちはどこへ行ったのだろうか？

ますます謎が深まるばかりで、解決すべき課題は山積です。



〈KN〉

イベント情報

- ◆通常展「八尾の地宝—埋蔵文化財調査センター収蔵品—」
内容：八尾市域から出土した旧石器時代から奈良時代の遺物を中心に展示
期間：令和2年2月19日(水)~6月12日(金)
時間：午前9時~午後5時(入館は午後4時半まで)
休館日：土、日、祝日
- ◆講演会「やお・埋蔵文化財トーク—あの遺跡・遺物は今—」
演題：「1~3世紀の地域間交流—河内と近江との関係—」
講師：西村公助 (当施設学芸担当)
場所：八尾市文化会館ブリズムホール4階会議室2 (八尾市光町2-40)
日時：令和2年5月24日(日)午後1時30分~(先着50名、資料代200円)



八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌
『八尾・よろず考古通信 22号』

発行：2020年3月31日 八尾市立埋蔵文化財調査センター
(編集：指定管理者 公益財団法人八尾市文化財調査研究会)
〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2
TEL・FAX 072-994-4700
E-mail：maibun_zyao@cmail.plala.or.jp

